

長屋と人々の暮らし⑥

長屋で暮らす人びと

江東区深川江戸資料館

江戸の町の発展とともに増加した長屋住まいの人びとの生活振りは、現在でも時代劇や時代小説、江戸時代から続く歌舞伎や落語でも多く取り上げられています。本号では、町の発展に深く関わる、長屋で暮らす人びとの生活についてみていきます。

1. 江戸の町の発展と長屋

江戸の町は、天正18年(1590)、徳川家康の江戸入府後より開発・整備が進められ、その人口は慶長末年(1610年頃)には約15万人程度と記録されていますが、17世紀後半には町人人口が約35万人、のちに享保期(1716～1736)には、約50万人へと増加します。幕末の頃になると、武家地と寺社地等を除いた町人地は江戸全体の約16パーセントで、最大60万人弱の人たちが生活していたといえます。

文政11年(1828)の記録によれば、江戸の平均的な店借率(長屋住まいの借家人)は、約70パーセントに達していました。とりわけ、深川地域は82.5パーセントを占めており、江戸市中で最も高い割合でした。

当該地域には、常設展示室のモデルとなった深川佐賀町があります。当時の深川佐賀町の概況は、町内の惣家数が312軒で、その内、店借が249人でした。こうした人びとの生業は棒手振と呼ばれる小商人や、小職人であり、決して裕福な暮らしではありませんでした(資料館ノート第113号参照)。しかしながら、都市生活を支えたこれらの職業を生業とした深川の長屋に暮らした人びとは、江戸市中の発展に欠かすことのできない存在であったといえます。

2. 庶民の暮らし

(1) 生活の道具

長屋で暮らす人びとが日常で使っていた道具の中でも、台所には火をおこすための道具が必需品であり、居間や夜道には照明が必要です。図1には、江戸の庶民が使った生活道具がひとつひとつ分かりやすく描かれています。その中には、ひしゃくや提灯、はたき



【図1】芳虎「新板かつて道具尽」
安政4年(1857) 国立国会図書館蔵

やシュロのほうき等があります。長屋で生活する中で、このうちどれだけが揃っていたかは不明ですが、四畳半という狭い生活スペースをいかに有効活用するかが住みやすさを左右していたので、多くの物を置くことはしなかったようです。これらの生活道具は、現在でも使うことがある馴染み深い道具もあります。近代になっても大きな生活環境の変化がなかったため、生活様式も大きく変化することがありませんでした。

また、電気がなかった江戸時代は、夜になると辺りは真っ暗になり明が必要になります。そこで、人びとは照明具として主に行灯を用いていました。

行灯は、油を入れた小皿に灯芯を浸して火をつけ、回りを和紙で囲んだものです。その油には、主にイワシやニシン等から抽出された魚油が使われました。魚油は燃やすと悪臭を放つため、長時間使うことは

なく、夜も遅くならないうちに火を消して眠りに就いていたようです。油には、菜種油を用いることもありました。高価だったため使える家は限られていました。

(2) 町の設備

江戸の町には、町の防犯を担うための「町木戸」や「長屋木戸」と呼ばれる門を設置しました。

木戸は、市中の要所や町々の境界に設けられた治安維持のための門です。町木戸は「明け六つ」(午前6時頃)に開けられ、「夜四つ」(午後10時頃)に閉まります。

裏長屋の入口にも木戸があり、長屋木戸は「明け六つ」に開けられ、「暮れ六つ」(午後6時頃)に閉まります。裏長屋への出入り口は木戸のみで、そこを閉めると出入りができなくなります。木戸の上には、住民の表札を兼ねた看板や貼紙が掲げられているものもありました。

(3) 人びとの生活

江戸の一日は、夜明けとともに始まります。朝、起床すると、朝食の支度にとりかかります。江戸では、朝のうちに一日分のお米を一度に炊いていました。朝食は、ご飯と味噌汁、漬物が一般的で、昼には、朝炊いた冷や飯と残った味噌汁で済まし、夜はそれに加えて野菜の煮物や焼き魚などのおかずが一品ついたといえます。

そして、男性は棒手振などの小商人や、大工、左官、板木師、塗師などの小職人として働いていました。一方で女性は炊事、洗濯、掃除などの家事や育児以外にも働く機会がありました。江戸時代の洗濯は、たらいを使った手もみ洗いが広く普及していました。一部には、着物の縫い目をほどく洗い張りや、洗濯を専業とする商売もあったようです。

他に、機織りなども女性の仕事とされていました。そして、商いを営んでいる店の場合は、外廻り等の男性に対して、店番や勘定などは女性が担うことが多かったそうです。

また、江戸時代の人たちは、農民も町人も教育に熱心だったといえます。人びとは生活が苦しくても、子どもたちを寺子屋に通わせました。寺子屋の授業は、朝早くから昼過ぎまでというのが普通でした。7歳ぐらいから15歳ぐらいまでの子どもが机を並べ、それぞれが与えられた手本に沿って勉強する個別指導という方法が一般的です。「読み・書き・そろばん」の他、手紙の書き方等の一般常識や、女子には行



【図2】 式亭三馬 作・歌川国直 画「浮世床」
文化8年(1811) 江戸東京博物館蔵

儀作法や華道、茶道や香道なども教えられていました。

(4) 人びとの社交場

江戸の町には、湯屋(風呂屋)があります。多くが入込入込とって混浴であったとされています。しかし、風紀上問題があるとして、寛政3年(1791)に男女の混浴が禁止されたため、構造的に男女別となっていました。完全に規制はできなかったようです。

湯屋には、入ると脱衣所があり、洗い場がしきりもなく続いていました。ざくろ口(入口)をくぐると湯槽があり、蒸気が逃げないように一段高くなっています。2階部分は、囲碁将棋卓などが置かれており、湯屋は江戸庶民の社交場となっていました。

湯屋を出た後は、髪結床で髻を結び直します。その様子は、図2に描かれています。そこには、長屋の一角に店を構え、客はあがりかまちの板敷きに座り、月代や顔をそり、髻を結び直してもらっています。湯屋と同様、順番待ちの客にとっては良い社交場であったといえます。

以上みてきたように、長屋の人びとの暮らしとともに江戸の町の発展や江戸における生活があったといえます。その生き生きとした暮らし振りは、現在も歌舞伎や落語のなかで息づいているのではないのでしょうか。

(主な参考文献)

喜田川守貞編「守貞謄稿」(天保8年・1837～嘉永6年・1853) 国立国会図書館蔵

関山直太郎『近世日本の人口構造』(吉川弘文館/1958)